

伊野川から忠別川までの地名⑬

前回まで「交通路としての江丹別川」

について述べたが、「アイヌの交通路」という観点から、松浦武四郎が安政五年（一八五八年）に、上川から十勝川筋へ山越えしたルート^①を踏査検証する「松浦武四郎の十勝越えを歩く会二〇一八実行委員会」の踏査を紹介した。

踏査の最終週の四月七日は、上富良野町東中コミュニティ広場に集合、フットパス班十名、ルウチン班十名、ポンルウチン班（山中一泊）六名、カムイロキ班（山中二泊）三名の二十九名と見送り人で出発式が行われた。その後サツテクペ、ペルイ六五九^②地点までバスで移動し、各班の日程で踏査し、山中二泊のカムイロキ班三名は、四月九日の午後五時五十分にゴール予定地の屈足温泉に到着した。筆者も到着式に立ち会ったが、この記念すべき踏査報告書の

完成が、期待されている。

なお、右の踏査は、北海道新聞の旭川版に四月十三日に紹介された（十勝・帯広版は、四月十一日に掲載）。また、『メディアあさひかわ』の五月号には、三ページにわたり踏査記事が掲載されているので、ここに紹介させていただきます。

さて、当連載は、No.38から旭川市域の石狩川の最下流にある内大部川^{（なだぶがわ）}から上流に向かってアイヌ語地名の地名解をしてきた。今号で取り上げる「近文^{（ちかふみ）}」の地名起源の「チカフニ」は、それ以前の号の記事と重複する部分があるので、ご承知いただきたい。以下、「忠別川」なども同じであるが、今後は、特にこのような注記を省かせていただく。

掲載地図は、松浦武四郎が安政六年（一八五九年）に作成した『東西蝦夷山川地理取調図』（松浦図）である。エタ

ンツブト（江丹別川川口）とラサラベブト（オサラッペ川川口）の間に、「チカフニ」があり、四角で囲んである。これは、近文の起源の「チカフニ」は、山の名前であることを表している。

松浦武四郎は、安政四年（一八五七年）五月二十五日（陽暦六月十六日）、カムイコタンのハルシナイで、鱒漁に来ていたシイヒラサ一家に出会う。そこで、主人のシヒラサ（五十歳）に上流の名前を聞き、野帳（フィールドノート）の『第二番』に書き付けたのが、写真①である。「チカフニ 山の名也 左 古人家二軒今はなし」と記録した。

翌日、松浦武四郎は、アイヌの人たちの漕ぐ丸木舟に乗って、ここを通り、再び野帳に写真②のように書いた。

チカフニ 左山に大岩見ゆ 古人家チフク コケラといふアイヌ浜（註「石狩浜」にて漸々稼僅也）
右のように、「チカフニ」「チカフニ」と、濁点の有無の違いはあるが、川上に向かって左（右岸）にある山であること、昔、チフク、コケラの二軒の人家があったが、今は石狩浜で、細々と生活している



③チカフニの図



④チカフニの大岩

記録したのである。

また、報文日誌の「再篙石狩日誌」は、写真③のように「チカフニの図」を描き、次のように記述した。

チカフニ（前文省略）凡頂上まで五丁計、上に岩有り、転び落つべきかとも思ふ形也。地位南向きにてうしろの方平山を屏風を立てし如く廻り、其の間平地にて風景よろし。（後文省略）

写真④は、現在の「チカフニの大岩」である。報文日誌の「屏風を立てし如く」の文章に合致している。

ただし、省略した後文に、松浦武四郎はチカフニに登り、そこからの眺望を記しているが、野帳から全くのフィクションであることが分かる。「再篙石狩日誌」には、このような類の文章が多いので、注意する必要がある。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

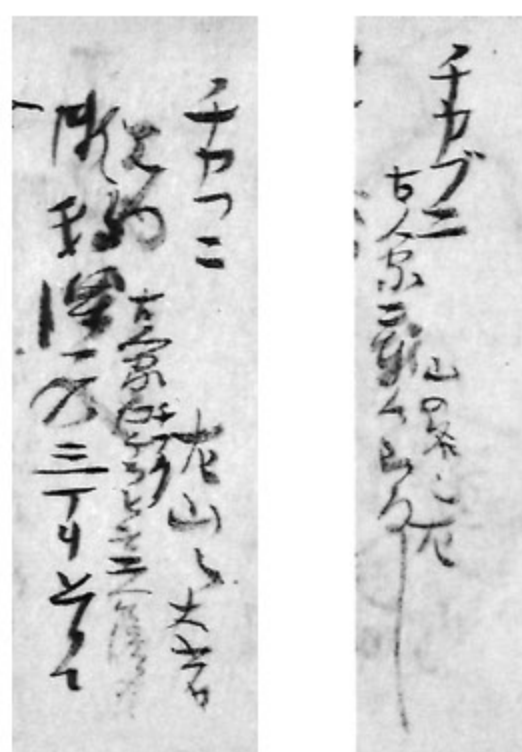
124

高橋 基



石狩川

【松浦図】



① 野帳
② 野帳
と生活している

（アイヌ語地名研究会幹事）
※毎月第1週号に掲載します